

オフィシヤル

ベトナムにおける公式的な戦争の記憶

——記念碑と戦争展示をめぐる考察

平山陽洋

はじめに

現存する社会主義国家ベトナムは、二つの大きな戦争を経験した。一九四六年から五四年まで戦われた独立戦争である第一次インドシナ戦争と、六〇年代から七五年まで南北統一を目指して戦われた第二次インドシナ戦争である。ベトナム国内では、前者を抗仏抗戦、後者を抗米抗戦と呼ぶ。これら二つの戦争の記憶は、今日にいたるまで、社会主義を標榜する党を中心とした国家支配体制を正当化するための、重要な文化資源であり続けた。ベトナムにおいては、党の主導により輝かしい勝利がもたらされたとする公式的な戦争の記憶が絶えず生産され、喧伝されてきた。一

方で、戦時期に人びとが体験した苦難や犠牲をめぐる私的な記憶等のオルタナティブな記憶は、あくまで公式的な記憶を脅かしすぎない限りにおいてのみ、社会における表明を許されてきた観がある。したがって、党の指導の拙さを正面から糾弾するような記憶や、人びとのあいだの裏切りや内紛を赤裸々に暴露する記憶といった、公式的な記憶と齟齬をきたす対抗的な記憶は、社会的にほとんど表面化しえないできたともいえる。とはいえ、今井昭夫が指摘するように、今日少しずつ、公式的な記憶と性質の異なる記憶が民間レベルで表出する、「記憶の社会化」が進みつつある（今井二〇一三）。

いずれにせよ、ベトナムにおいて公式的な記憶は、人びとが好むか好まないかを別として、長らく強い影響力をもってきたし、現在でも一定の力を保っている。それゆ

え、その記憶の形態を検討することは、ベトナムにおける戦争の記憶の全体像を理解するうえで、欠かせない作業である。その検討は、また、公式的な記憶と形態を異にする民間レベルの記憶の、「異なった形態」に込められたオルタナティブな意味を考える前提として、必要となる作業でもある。本稿では、ベトナムにおいて公式的な記憶が構築される際に、いつ、いかなる方法や意匠が採用されてきたかを検証したい。具体的には、記念碑という、社会空間の一角を物理的に占有する公共建築物と、戦争にまつわる遺物や写真、絵画や彫刻等を博物館等で展示する文化政策について時系列にそって検討する。また、その検討に際し、ベトナムにとって国家建設の模範とされた、ソ連や中国といった社会主義諸国からの同時代的な文化的影響の如何についても考察したい。

I 烈士追悼碑の登場と浸透

——一九五〇年代を中心に

戦争にまつわる記念碑のうち、現在のベトナムで最も数が多いのは、革命や戦争の殉死者を悼む烈士追悼碑である。烈士追悼碑は、ベトナム語で *Dài Tuơng niệ̄m Liệ̄t sĩ* と表記するが、これを漢字に変換すると「台想念烈士」とな

る。この追悼碑は、ベトナム各地において、烈士墓地の区画内や、都市、町、村の公共空間に建設されている。さまざまな意匠が存在するが、いずれも基本的には、地面に屹立するオベリスク型であるという共通点をもつ。

こうした追悼碑を社会主義政権が建造する歴史は、一九五〇年代に始まったようである。建築家、建築史家のドン・ドゥック・タインによると、最初の追悼碑が築かれたのは、抗仏抗戦期の政権疎開地の一つであるトゥエンクアン省チエムホア県で五一年に開催された、第二回党全国大会会場でのことであった。碑文には、「共産主義と祖国のために犠牲となった同志を忘れない」とある。このときの追悼碑は、しかし、オベリスク型ではなく、石碑に近い形状であった。さらにこの石碑は、遮るものなくむき出しに置かれたのではなく、藁葺き屋根に覆われた、前方が三間に区切られた空間の内側に丁重に設置された。碑の前には香炉が置かれている (Doãn Đức Thành 2007、写真1)。石碑という形状が採用された理由を考えたとき、伝統的な墓碑等を通してこのかたちに馴染みがあったという事情や、戦争中ゆえ敵軍に党大会開催地を覚らせない低さに抑える必要性があった事情、等に思いいたる。

一方、空間にそびえるオベリスク型の追悼碑が建設されたのは、戦争終結後であった。設置場所は、ハノイのバーディン広場である。バーディン広場とは、かつてのインド



写真2 1955年にバーディン広場に設置された追悼碑

(出所) Đoàn Đức Thành 2007: 35



写真1 1951年第2回党全国大会会場で設置された追悼碑 (出所) Đoàn Đức Thành 2007: 35



写真3 マイジック烈士墓地の追悼碑 (2013年)

シナ総督府の眼前に広がった空間であり、四五年九月二日にホー・チ・ミンが独立宣言を読み上げた場所でもある。つまり、ベトナムにおいてそこは、政治的な支配と権威の中心を象徴的に意味する場所であった。ドアンは、ハノイに帰還した政権が、そのバーディン広場で五五年に建設した木製の碑が、オベリスク型の追悼碑の最初であると指摘する(写真2)。ドアンによると、この追悼碑の特徴として、上部に伝統的な家屋の屋根を表す「民族的な」意匠を施した点が挙げられる。また、「祖国は功績を忘れない」という言葉を刻むという、今日まで継承される意匠も、この碑に始まる。そして、この追悼碑がモデルとなり、以後各地で同様の碑が建設されていった。そのなかで最も古いものの一つがハノイのマイジック烈士墓地に現存する碑

で、これはバーディン広場に設置された碑と設計者を同じにし、意匠が踏襲されたという。バーディン広場の碑が別のものに代わった現在、烈士追悼碑の初期の意匠を伝えてくれるのが、このマイジックに置かれた碑である（写真3）。ただし、この碑は木製ではない（Doan Đức Thành 2007）。

しかし、バーディン広場の追悼碑が設置されるにあたり、一定の高さのオペリスク型が採用された理由は定かでない。設計者であるグエン・ヴァン・ニンが、植民地期のハノイでインドシナ美術高等学校に学んだ経歴^{＊2}に着目し、彼が学生時代にヨーロッパ式の戦没者追悼碑の知識を得て



1 ソンラ省モックチャウ県の追悼碑



2 ゲアン省クインリュウ県の追悼碑



3 ロンアン省ロンホー県の追悼碑

写真4 現在のベトナム各地の追悼碑

（出所）Doãn Đức 2012

おり、その様式をベトナムに導入した、と推察することも可能だろう。あるいは、ヨーロッパの記念碑文化がソ連や中国を経由して伝わった可能性も考えられる。というのも、抗仏抗戦後の国家建設にあたり、ソ連と中国の両国の多岐にわたる指導、つまり、政治や経済だけでなく社会や文化のあり方も含めた指導が大きな影響を与えたためである。いずれにせよ、ベトナムで烈士追悼碑は五〇年代以降に各地に広まり、人びとにとって、戦争による死者を追悼する馴染みの公共建築物となった。そして、とくに抗米抗戦終結以降には、抽象性の高いモダニズム様式から、「伝統」を強調する様式、人物像を伴った様式まで、追悼碑の

意匠の多様化が進んでいく (Doãn Đức 2012² 写真4)。さまざまな意匠を備えた烈士追悼碑の建造は、また、各行政レベルにおける烈士墓地の建設や、墓地で催す烈士追悼儀礼の創出といった社会政策とも関連していた (Malmey 2001、マラーニー 二〇〇八)。一般の人びとにとつての身近な者たち、たとえば家族や親戚、近隣住民といった者たちの、革命と戦争における殉死を悼むそれら社会政策が複合的に実施されるなかで、追悼碑が人びとに馴染みのものになったと考えられる。

II 戦争の展示と鑑賞

——一九五〇年代末を中心に

烈士追悼碑の建設が始まってから数年、一九五〇年代末になると、新たな文化政策として、「歴史遺産保存・博物館・展示工作」が実施された。文化省歴史遺産保存・博物館局が六〇年から六一年にかけてまとめたと推定される資料によると、「歴史遺産保存・博物館・展示工作」は、抗仏抗戦に関する遺物や写真、絵画や彫刻を展示し、人びとに集団的に鑑賞させることを大きな目的の一つとした (Mc Bao tôn Bao tàng n.d.)。そこでは、同時に、五九年に中央革命博物館学院が設置されるに際しソ連の専門家からの支援

があったと記されており、戦争展示の文化政策が実現されるうえで、ソ連の影響を読み取ることができる。

この資料によると、博物館、記念館、展示室といった常設の公共施設における展示に加えて、期間を定めた展示会も各地で催された。展示会には、小規模の展示物で各地を巡回する方式や、大小規模の展示物を特定の場所に陳列する方式があった。六〇年の時点で、中央政府の管理する博物館はハノイに三館、ハイフォンに一館あった。ハノイには、また、市が管理する記念館が三カ所設けられた。その他、省や村でいくつか展示室が設けられた (写真5)。こ

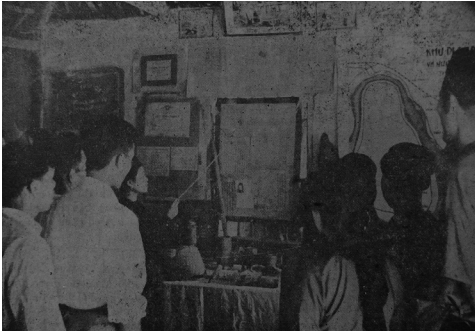


写真5 フート省スーニュー村の展示室

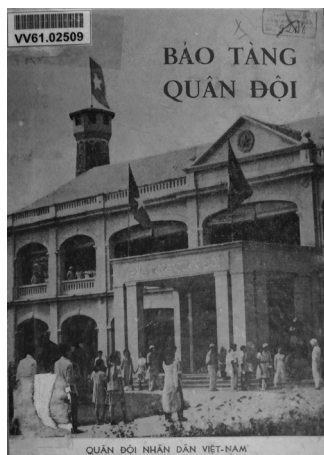
(出所) Trần Liên 1960: 34

れら常設施設の数合計二二であり、六〇年の一年間における訪問者総数は延べ人数で五五万人ほどだった。一方の展示会は、すべての展示方式を含めると、六〇年だけで北ベトナム全体で九六〇八回催され、延べ人数で一二〇〇万人が鑑賞に訪れた。鑑賞者の数が突出して多いのはハノイ、ハイズオン、ハイフォンであり、ハノイは二〇〇万を、ハイズオンとハイフォンは一〇〇万を超える。戦争後にフランス軍の撤収港に指定され、南ベトナムに逃れようとする人びとが集まったハイフォンや、そのハイフォンへのルートとなるハイズオン、長らくフランスの支配下にあったハノイといった土地では、住民を教化するために、公式的な戦争の記憶を浸透させる必要性がより強く認識されたのかもしれない。

いずれにせよ、五〇年代の末に、人びとは、博物館、記念館、展示室、展示会に足を運び、戦争展示を直接観賞した。加えて、それら展示の内容を間接的に「観賞」する機会もまた、人びとに提供された。展示内容を写真付きで紹介する小冊子が、五〇年代末から六〇年代前半にかけて複数刊行されたのである。たとえば、六〇年刊行の写真集『軍事博物館』は、かつてのフランス通信兵の駐屯地兵舎を接収して五九年一月にハノイで開場した同博物館の展示の構成と内容を、写真を数多く使用して紹介しており、抗仏抗戦中の大きな戦役や、人びとの生活と戦いを分かり



2 ディエンビエンフーの戦い(1954年)のジオラマ展示物の写真 (出所) Viện Bảo tàng Quân đội 1960: 46



1 博物館外観を写した写真集表紙

(出所) Viện Bảo tàng Quân đội 1960: front page

写真6 写真集『軍事博物館』(1960年)

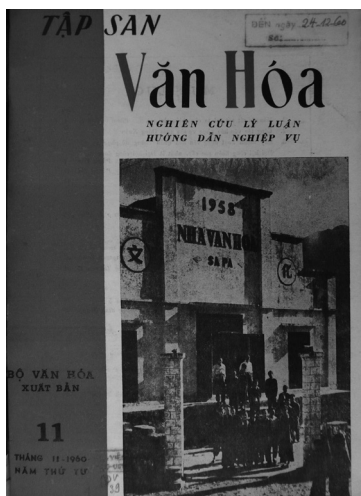


写真7 サパの「文化の家」の写真を掲載した雑誌『文化』1960年11月号表紙

(出所) Văn hóa 11 (1960), front page

やすくまとめている (Viện Bảo tàng Quân đội 1960⁷ 写真6)。また、やはり住民教化の政治戦略上重要な場所だったからか、ハイフォンにおける博物館の小冊子が六〇年に刊行されている (Bảo tàng Hải Phòng 1960)。

さらに興味深いのは、大小さまざまな規模の戦争展示の実施や、展示内容の小冊子による紹介と並行して、「文化の家」という名称の公共文化施設の建設が各地で進められた点である (写真7)。「文化の家」に集った人びとは、国家の提供する新聞や雑誌に目を通し、その内容について会話を重ねることで、国民としての共同性の意識を育んだろうし、その一環として、戦争に関する公式的な記憶を共有していっただろう。博物館展示を紹介する各種小冊子も、そのような場で回覧されたのかもしれない。歴史はさらに

繰り返す。そうした意識共有の場としての「文化の家」の建設が、抗米抗戦後の八〇年代にあらためて、統一された南ベトナムの各地を含め全国的に推進されたのである (Nhan 1984: 28; Nhà Văn hóa 1985)。そして、戦争をめぐる博物館展示の文化政策にソ連の影響を読み取れるのと同様に、「文化の家」における集団的な意識共有という文化実践にも、社会主義諸国からの影響があったと推測される。興味深いことに、五〇年代の中国で、絵物語を描いた連環画と呼ばれる小冊子が、貸本屋という場を介して人びとのあいだで回し読みされていた (中野二〇〇八)。これなどは、ベトナムにおける「文化の家」における実践との同時代的な連関を感じさせる文化事象だろう。

Ⅲ 人物像記念碑と景観の変容

1 戦後復興のなかの人物像記念碑

——一九八〇年代を中心に

一九八〇年代に入ると、従来の烈士追悼碑や戦争展示と異なるかたちで、戦争の記憶や、あるいは植民地期の闘争の記憶を、後世に伝えようとする公式的な記憶の形態が広がりを見せ始めた。その形態とは、人物像記念碑である。

ここで「人物像記念碑」と記したが、これはベトナム語の *Trưng đài* という語を念頭においている。この語は漢字では「像台」となる。この語の意味について明確な定義はないが、広義ではオベリスク型の記念碑や石碑を含んだ記念碑一般を指し、狭義では、人物を模した彫刻と、建築を組み合わせた記念碑を意味する (Le Binh 1985; Lý Trúc Dũng 2006)。現在のベトナムでは、この語は後者の記念碑を指す場合が多い印象である。そのため、ここでは「人物像記念碑」と表記する。

さて、この人物像記念碑を扱った記事が、八〇年代半ばに、新聞『文化芸術』の誌面にしばしば登場する。ある記事では、公共空間を占める最新の記念碑様式として、人物像記念碑を紹介している。そこでは、この記念碑に馴染みのない読者を念頭に、彫刻に用いられるレリーフ等の基本技術について解説するとともに、記念碑を眺望しやすいよう周囲の空間が設計される事情等が説明された (Le Binh 1985)。また、北部から南部までの各地における、戦争と独立に関する人物像記念碑の建設を伝える記事も掲載された (Trương Đông 1984; Nguyễn Hưng 1985; Nguyễn Thụy Báo 1985)。加えて、写真による人物像記念碑の紹介も多い (写真8)。同時期には、抗仏抗戦初期のハノイ攻防戦を記念する人物像がハノイ市内に設置されており、その落成は八四年であった (写真9)。



1 バクザン市に設置された烈士ゴ・ザー・トゥ (1908-35) の像

(出所) Nguyễn Thụy Báo 1985: 3



2 ホーチミン市に設置されたホー・チ・ミン像とそれを仰ぎ見る子どもたち

(出所) Nguyễn Hoài 1984: 6

写真8 新聞『文化芸術』誌面に掲載された人物像記念碑

八〇年代に人物像記念碑の建設が推進された背景として、抗米抗戦からの戦後復興を目指す文化政策において、ソ連の記念碑文化を「新しい文化」の一つとして受容しようとする動きがあったことを指摘できる^{*3}。そうしたソ連文化が新聞『文化芸術』で取り上げられており、たとえば、「母なる母国」像を紹介する記事がある。そこでは、ヴォ

ルゴグラードのママイの丘に置かれた像や、レニングラードにあるピスカリョフ墓地の像の写真が付されている。この記事からは、それら荘厳な像を建設しうるソ連文化の先進性を視覚的に訴え、その文化を模範とする意識を涵養しようとする工夫が読み取れる（Nguyễn Trân 1985）。別の記事では、そうした「新しい文化」のベトナムへの導入を示す大きな事例として、ハノイ市でレーニン像の設置が進められ、八五年に落成式が執り行われたことを伝えている。その像の設置は、ベトナムとソ連との友好関係を示す一大行事として、ソ連の技術者による支援のもと実現され、人物像や台座に使用された素材は非常に良質のものであった（Hai Nhân 1985）。

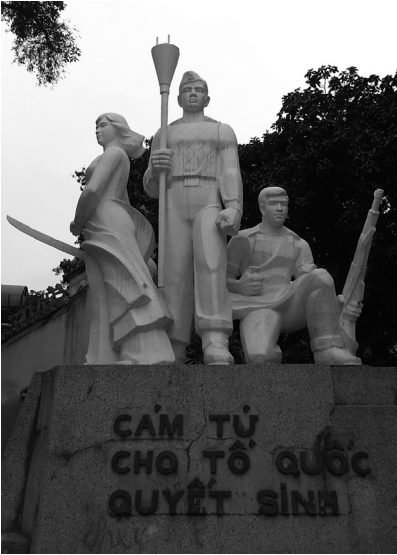


写真9 抗仏抗戦期のハノイ攻防戦を記念する人物像（2010年）

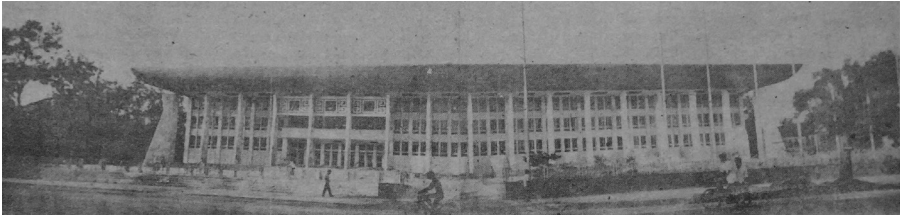


写真10 落成当時の労働文化宮殿（出所）Thanh Thủy 1985: 2

こうした記念碑文化の導入は、さらに、抗米抗戦後のベトナムにおける都市再開発や国土再開発をソ連と東欧諸国の建築家や都市計画家が支援した事情にも由来している。たとえば、ハノイ市におけるレーニン像やハノイ攻防戦を記念する像の落成と同時期の八五年に、ソ連の専門家の支援のもと、労働文化宮殿が建設されている（Thanh Thủy 1985）。この宮殿は、今日のベトナムでは旧時代の無粋な建築の代表と認識される場合が多いが、それは当時、最新の技術が投入された、ベトナム随一の総合娯楽施設としてハノイの都市空間に登場した。そこには、一二七〇人が座れる座席を備えた歌劇場や三七五

人分の座席を備えた映画上映室が設置されていた。その他にも、露英仏独の四方国語に対応した同時通訳ブース、亜熱帯のハノイにあつて気温を二〇度前後に保つ空調設備、スプリンクラーが自動で作動する火災予防装置、等を備えていた（写真10）。ハノイにおいては、こうした文化施設の建設と記念碑の建設が、抗米抗戦からの戦後復興が目指されるなかで、ソ連式の都市空間構想のもと相互に結びつけて推進されたと考えられる。⁴なお、米中接近や中越国境紛争等が起こった後の八〇年代に、そうした都市再開発、国土再開発、記念碑文化導入の文脈で、ベトナムと中国とのあいだの「友好的な」文化的影響関係を想像するのは困難だろう。

2 人物像記念碑と暗い一九八〇年代という

イメージ——二〇〇〇年代を中心に

戦後復興とともに建設が推進された人物像記念碑は、しかし、烈士追悼碑とは対照的に、人びとに馴染みのものとはならなかったようである。周知の通り、抗米抗戦後の戦後復興は、計画経済の破綻とともに頓挫し、それが八六年の市場開放につながった。また、ベトナムにとっての模範とされたソ連は九一年に崩壊した。その後現在にいたるまでのあいだに、人物像記念碑は、暗い八〇年代の歴史の象

徴として受け止められ、人びとの否定的な感情を惹起する公共建造物になった観がある。また、人物像記念碑のもつ社会的役割が烈士追悼碑と異なり、実際に生き、そして死した身近な者たちの追悼という意味が弱いことも、その不人気の原因であるかもしれない。

たとえば、前節で触れた、ハノイ攻防戦を記念する八四年設置の人物像に対して、二〇〇〇年代になるとさまざまな批判が表明された。「剣もつ女はまるで掃き掃除。敵討つ男はくつろいで一休み」という、デザインの粗雑さを揶揄する批判に加え、真ん中の男性の刺突爆雷の掲げ方は自爆の危険性が高く、現実的にありえなかった、また、台座に記された言葉は抗仏抗戦期には用いられていない、という史実に照らした批判、等があった（*Xây mới Trưng đài*、*Quyết tử*… 2003；*Dỗ Diễm Huyền* 2003）。こうした批判は、ハノイ攻防戦に関する新たな人物像記念碑を設置しようとする動きのなかで現れたものであり、八四年の像は撤去してしまい博物館等に収納するのがよい、という議論も生まれた。しかし、やがて状況は、興味深い方向に変化した。八四年の人物像設置にあたり、本来は優れた内容だった設計者キム・ザオの原案デザインが大きく改変され、結果的に粗雑な像が完成したという、当時の事情が明るみになったのである（*Duong Trung Quốc* 2003、写真11）。そして、原案のデザインで表現されていた人物の躍動感が失われたこ



写真11 抗仏抗戦期のハノイ攻防戦を記念する人物像のデザイン原案（ミニチュア像）

（出所）Đương Trung Quốc 2003: 38

とや、そもそも男女二人の人物構成案だったのが、労働者と兵士、女性という、紋切り型の社会主義的人物構成に変えられたこと、等が批判的に論じられた。そうした状況変化のなか、ハノイの人物像に対する批判は、像の姿形に対する不満という意味を超えて、八〇年代の文化行政の酷さや拙さといった、暗い時代の負のイメージに対する批判としての意味合いを帯びていった*。

しかし、人びとの否定的な感情があるにもかかわらず、人物像記念碑の建設は、二〇〇〇年代以降に加速している。それをとくに速めたものの一つとして指摘できるのが、二〇〇四年一〇月に文化通信省から公示された公文第3767/VHTT-MTNA号である。この公文においては、二〇二〇年までのあいだに地方各地で人物像記念碑を設置することが定められた（Bô Văn hóa-Thông tin Yên



写真13 かつて南北ベトナムを分かったクアンチ省ベンハイ川の南側に設置された人物像（北ベトナムに渡った夫を待つ妻と子の形象）（2007年）



写真12 クアンチ省に設置された人物像（時代ごとの連絡兵の形象）（2007年）

catu... 2004)。そして、こうした公式的な文化政策に従うかたちで、以前に人物像記念碑文化を担った経歴をもつ芸術家や建築家が近年あらためて動員され、八〇年代を想起させる意匠の像が新設されている(写真12・13)。たとえば、六〇年代初頭にキエフ美術大学で彫刻を学んだ経歴をもつ彫刻家レー・デイン・クイーが、二〇〇〇年代にクアンチ省ベンハイ川に設置された写真13の人物像の設計を担当した(Trung Thao 2011; Canh Linh 2013)。人物像増設という近年における文化行政の動向について、研究者のなかには、グローバリゼーションの影響があると指摘する者もいる。現在のベトナムにおいて、貧富の格差が拡大し、高所得者でなければ住めない洒落た高層マンションが数多く建設される一方で、かつて東側社会主義諸国からの支援で建設され、労働者や退役軍人等を等し並みに住ませた集合住宅は、古めかしく使い勝手の悪いものとして取り壊されつつある。しかし、「東側文化」の同じような「古めかしさ」を感じさせるはずの人物像記念碑は、グローバリゼーション下で国民の共同性を訴える必要性から、ますます増えているという(Schwenkel 2012)。

いずれにせよ、二〇〇〇年代以降、八〇年代的な人物像記念碑文化がベトナムで再導入されている。しかし、八〇年代と二〇〇〇年代の文化行政には違いが見取れる。その違いは、人物像記念碑を眺める主体の想定が異なる点に

ある。八〇年代には、像が設置される地域の住民が、それを眺め、記憶を継承する主体と想定されたと考えられる。

それに対し、二〇〇〇年代になると、地域住民の他に、戦争に関する史跡等を訪れる国内観光客も含むものとして、その主体が考えられるようになった(Logan 2006)。もち

ろん、人びとの不満は根強く、人物像記念碑の設置は公金の無駄遣いであり、その設置よりは地域経済の成長にお金を使うべき、という意見が繰り返し示されている(Ly Truc Dung 2006; Logan 2006)。そうした批判を伴いつつも、現在のベトナムの景観は、人物像記念碑の増設とそれらを眺望する主体の変化とともに、変容し続けている。

おわりに

本稿では、ベトナムにおける公式的な記憶の構築を、一九五〇年代初頭からの烈士追悼碑の建造、五〇年代末からの博物館展示と鑑賞の実践、八〇年代を中心とした人物像記念碑の設置と二〇〇〇年代におけるその再推進と、時系列にそって検証してきた。一般的に言って、国民国家で公式的に構築される記憶は「上から」の押しつけとしての側面が強く、「下から」形成されるオルタナティブな記憶と対抗関係にあると理解される場合が多い。この理解は基本

的に正しいと思われるが、戦争の記憶における「上」と「下」の関係がすべて水と油の関係であるとまで断定することはできないだろう。たしかに、ベトナムにおける人物像記念碑に対する人びとの不満からは、「上から」の記憶に対する「下から」の抵抗感と拒絶が読み取れる。しかし、ベトナムにおける烈士追悼碑の広がり、実際に生き残った者の死を悼むという行為の、一般の人びとにとつての意味の重さゆえに現実化されえたのだろう。また、博物館展示と鑑賞の実践は、その実践のなかで導入された意識共有の方法を流用して、人びとが自分たちなりの共同性を作り出すきっかけを生みもしただろう。これらの事例からは、むしろ、「上から」作られる公式的な記憶の形態が「下から」の記憶を包摂したり、その記憶の形成を促したりする関係、つまり「上」と「下」の補完性が浮かび上がる。そして重要なのは、「上」と「下」の対抗関係や補完性の如何を理解する前提として、「上から」形成される公式的な記憶の形態を、具体的な歴史の文脈のなかに位置づけ直す作業である。さらに、ベトナムを事例にその作業を進める場合には、他の社会主義諸国との文化的関係が、いつどのように構築され、切断され、再構築されたかについての考察が不可欠となる。

もつとも、本稿では、戦争の記憶における「上」と「下」の関係についても、各種各様の記憶の形態が公式的

に採用されるにあたっての他の社会主義諸国からの影響についても、あくまで示唆的、試論的な考察を示すに留まり、実証的な検証を十分に展開しえたわけではない。そうした検証を、具体的な事例に即して綿密に進めることが、今後の大きな課題である。

●注

*1 なお、マイジック烈士墓地の碑の現在の姿が一九五〇年代当時とまったく同じと考えるのは無理があるだろう。塗り直し等の修復措置が、五〇年代に設置されて以降に幾度か施されたであろうことは、想像に難くない。しかし、その点を差し引いても、マイジックの碑が、現存する追悼碑のなかで、社会主義政権最初期の様式を現在に最も伝えるものであると考えるのは妥当であろう。

*2 グエン・ヴァン・ニンは一九〇八年にランソンで生まれ、二六年から三二年にかけて、ハノイのインドシナ美術高等学校建築科で学んだ。三九年にはフエでバオ・ダイ帝の休息用別邸を設計している。抗仏抗戦に参加した後は、バーディン広場の烈士追悼碑を設計するほか、首相府内のホー・チ・ミン執務室の設計を手掛けた (Zeyi'st Duy Chinh 2005)。

*3 ただし、一九八〇年代以前の社会主義政権が、人物像記念碑をまったく建設しなかったわけではない。たとえば、ハノイに現存する、革命に殉じた少年リー・トゥ・チョン(一九一四―三一)の立像や、六四年に南ベトナムでマクナマラ米国防長官襲撃を試み、処刑されたグエン・ヴァン・チョイ(一九四

○(六四)の胸像は、いずれも六〇年代後半に設置されたものである。両者は人物が南を向くかたちで据えられており、南北統一のための戦意高揚という意味をもったと思われる。ハノイ以外でも、たとえばタインホア省に六七年設置の人物像記念碑がある (Schwenkel 2009: 219, note 11)。これは、六五年にナムガンの民兵が米空軍機四七機を撃ち落した出来事を記念して設置された。こうした像の設計者としては、ソ連留学経験者等が抜擢された。しかし、ソ連留学経験者は、親ソ派を「修正主義」として排除する六〇年代の政治動向のなか、文化行政の要職につけず、ソ連で学んだ技術を発揮する機会を、あまり得られなかったようである (Logan 2000: 197)。

*4 抗米戦争後のハノイ市の都市再開発と、それに関わったソ連の建築家や都市計画家については、Logan (2000) の第二章「紅河の赤い都市——ハノイの社会主義的相貌を創り出す」を参照。また、シュワンケルは、ベトナム中部の都市ヴィンの再開発に対する東ドイツ都市計画家の支援を論じている (Schwenkel 2012)。シュワンケルによると、各社会主義諸国がそれぞれ異なる都市や地域の再開発を担い、ソ連がハノイを、東ドイツがヴィンを、ポーランドがハイフォンを、ブルガリアとルーマニアがタイビン省とタインホア省を担当した。なお、これら支援を受ける代わりに、ベトナムは東側各国に労働力を輸出した。

*5 刺突爆雷とは、日本軍から伝わった対戦車用の武器で、これを掲げる兵士は戦車に接近して先端に取り付けた弾頭をぶつけて爆発させる。この刺突爆雷は、四六年から四七年にかけてのハノイ攻防戦を象徴する武器として、絵画や彫刻で

描写されることが多い。

*6 その後、二〇〇四年一月二日に、ハノイ攻防戦を記念する新しい人物像が旧市街北方のハンダウ公園に設置された。一方、八四年の像は、博物館に収めるべきという意見が繰り返されつつも元のまま残され、現在にいたっている。

*7 レー・ティン・クイは、一九九〇年代後半以降、数多くの人物像記念碑の設計を手がけてきた人物であるが、その経歴が興味深い。彼は、六〇年代前半にキエフ美術大学で学んだが、数年もたたないうちに、ソ連に留学した他のベトナム人学生たちと同様に、本国に帰国させられた。彼は帰国後にベトナム美術学校を卒業したが、その後しばらくは彫刻作品を発表する機会を得なかった (Cahh Linh 2013)。こうした経緯は、おそらく、「修正主義」をめぐる当時の越ソ間の緊張と関連している (前注3参照)。

●参考文献

- 今井昭夫 (二〇一三) 「一九七二年クリスマス爆撃の記憶——ベトナム・ハノイ市カムテイエン通りの被災者への聞き取り調査」『東京外国語大学論集』八六号、二二五—二四二頁。
- 中野徹 (二〇〇八) 「英雄の読まれ方——小説『鉄道遊撃隊』の受容」望月哲男編『共産圏の日常世界』スラブ・ユーラシア研究報告集一、北海道大学スラブ研究センター、一三一—一三九頁。
- マラーニー、ショウン・K (二〇〇八) 「戦死者とともに生きる——現代ベトナムにおける遺骨と凶事、そして収束する物語」『クアドランテ』一〇号、七—三二頁。

- Bảo tàng Hải Phòng (1960) *Bảo tàng Hải Phòng*. Hải Phòng: Bảo tàng Hải phòng.
- Bộ Văn hóa-Thông tin Yêu cầu các Địa phương Thực hiện 8 Nội dung khi Xây dựng Tượng đài. (2004) *Toàn cảnh Sự kiện và Dự luận* 172: 36.
- Cánh Linh (2013) Một Nhà Điều Khắc Độc đáo. <http://suchoedoisong.vn/van-hoa-the-thao/moi-nha-dieu-khac-doc-dao-20130713022133993.htm> (October 13, 2013).
- Đoàn Đức (2012) Kiến trúc Đài Tưởng niệm liệt sĩ: Biểu tượng của Lòng Tri ân. <http://kienthuc.net/2012/07/29/kien-truc-dai-tuong-niem-liet-si-bieu-tuong-cua-long-tri-an/> (October 13, 2013).
- Dương Trung Quốc (2003) Xây mới Tượng đài ‘Quyết tử...’ Nền Trờ về với Phác thảo Góc? *Thế thao và Văn hóa* 77: 38-39.
- Đỗ Diễm Huyền (2003) Những Vân khúc quanh Tượng đài ‘Cam tử.’ <http://vietbao.vn/Van-hoa/Nhung-van-kuoc-quanh-tuong-dai-Cam-tu/20038027181/> (October 13, 2013).
- Đoàn Đức Thành (2007) Kiến trúc Đài Tưởng niệm liệt sĩ: Từ ‘Mẫu chuẩn’ đến những Sáng tạo Độc đáo! *Thế thao và Văn hóa* 89: 35.
- Hải Nhân (1985) Một Công trình Lớn của Tinh Hữu nghị Việt-Xô tại Hà Nội: Tượng đài Lê-nin. *Văn hóa Nghệ thuật* 171/172: 3, 21.
- Lê Bình (1985) Mấy Suy nghĩ về Xây dựng Tượng đài. *Văn hóa Nghệ thuật* 174: 9.
- Logan, William (2000) *Hanoi: Biography of a City*, Seattle: University of Washington Press.
- Logan, William (2006) Dien Bien Phu, Vietnam: Managing a Battle Site. Metaphoric and Actual. *Quatre-Mers. Revue d’Histoire:*

- explorations, colonisations, independences* 94 (350/351) : 175-192.
- Lý Trúc Dũng (2006) Tượng đài Việt nam: Có đơn và Tê nhạt. <http://tiasang.com.vn/Default.aspx?tabid=62&News=1430&CategoryID=41> (October 13, 2013).
- Malarney, Shaun K. (2001) “The Fatherland Remembers Your Sacrifice”: Commemorating War Dead in North Vietnam. Hue-Tam Ho Tai (ed.), *The Country of Memory: Remaking the Past in Late Socialist Vietnam*. Berkeley: University of California Press, pp. 46-76.
- Năm 1984: 28 Nhà Văn hóa. (1985) *Văn hóa Nghệ thuật*, số Tết: 5.
- Nguyễn Duy Chiến (2005) Những Điều Ít biết về Người Thiết kế Nhà sàn Bác Hồ. <http://www.tienphong.vn/xahoi/20667/Nhung-dieu-it-biet-ve-nguoi-thiet-ke-nha-san-Bac-Ho.html> (October 13, 2013).
- Nguyễn Hoài (1984) Chu tịch Hồ Chí Minh và Việc Giáo dục Thiệu nhi. *Văn hóa Nghệ thuật* 150: 5-8.
- Nguyễn Hùng (1985) Tượng đài Quê Sơn. *Văn hóa Nghệ thuật* 161: 9.
- Nguyễn Thủy Báo (1985) Hà Bắc Xây dựng Đời sống Văn hóa Mới. *Văn hóa Nghệ thuật* 169: 3.
- Nguyễn Tân (1985) Hình tượng Bà mẹ Xô-viết trong Tượng đài. *Văn hóa Nghệ thuật* 164: 7.
- Schwenkel, Christina (2009) *The American War in Contemporary Vietnam: Transnational Remembrance and Representation*, Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press.
- Schwenkel, Christina (2012) Civilizing the City: Socialist Ruins and Urban Renewal in Central Vietnam. *Positions* 20 (2) : 437-470.
- Thanh Thủy (1985) Cung Văn hóa Lao động: Công trình của Tinh Hữu nghị Việt-Xô. *Văn hóa Nghệ thuật* 173: 2.

Trần Liên (1960) Xứ-Như, Xã Dầu tiên của Miền Bắc Xây dựng Nhà Chung bày Bảo tàng Xã Văn hóa 6: 32-34.

Trong Đông (1984) Tương đài Núi Nứa Anh dũng. Văn hóa Nghệ thuật 151: 42.

Tương Thảo (2011) Lê Đình Quý: Một Nghệ sĩ Tài hoa. http://www.vietnamfineart.com.vn/Story/Cactaegia_tacpham/2011/7/2886.htm# (October 13, 2013).

Văn hóa 11 (1960).

Viện Bảo tàng Quân đội (1960) Bảo tàng Quân đội, Hà Nội: Nhà Xuất bản Quân đội Nhân dân.

Vũ Bảo tôn Bảo tàng (n.d.) Dự thảo Bảo cáo Công tác Bảo tôn Bảo tàng và Triển lãm năm 1959 và 1960 (Thư viện Quốc gia/Hà Nội).

Xây mới Tương đài 'Quýết tử... Xứ lý Tương đài Cũ thế nào?' (2003)

Thế thao và Văn hóa 46: 37.

●著者紹介●

①氏名……平山陽洋(ひらやま・あきひろ)。

②所属・職名……北海道大学スラブ研究センター・学術研究員。

③生年・出身地……一九七七年、大阪府。

④専門分野・地域……アジア冷戦史、ベトナム現代史。

⑤学歴……東京外国語大学外国語学部東南アジア課程ベトナム語専攻)、東京外国語大学大学院地域文化研究科(地域文化専攻)。

⑥職歴……学術研究員(二三歳、四年)。

⑦現地滞在経験……ベトナム(二四歳、一年半、民間企業非常勤職員)。

⑧研究方法……史料調査が中心だが、研究対象とする事象の起こった社会空間の自然地理的条件や政治地理的条件を考えるためのフィールド調査も実施。

⑨所属学会……アジア政経学会、日本アーカイブズ学会。

⑩研究上の画期……第二次インドシナ戦争。世界各地で、盛り上がる反戦運動を背景に、現地語を習得しベトナム研究を行う研究者が登場。反戦運動に積極的に関わった者も多く、彼らの研究では、同時代とどう切り結ぶか、戦争を担うベトナムの国家や社会の実態をいかに考察、叙述するかという問題意識が、直接的、間接的に表明された。緊張した問題意識から生まれた諸研究が、以後のベトナム研究の礎となった。

⑪推薦図書……土屋健治『カルティニの風景』(めこん、一九九一年)。地域研究者は、現地で得たさまざまな経験から、問題意識を錬成する。その錬成の感覚を繊細に伝えつつ、インドネシアのナシヨナリズムを論じたのが本書。とくに地域研究を志す初学者に読んでもらいたい。